

関係詞の that は接続詞である

時 崎 久 夫

1. はじめに

小論は、伝統的に「関係詞の that」と呼ばれているものは、関係詞ではなく、接続詞であるということを述べる。that が which などの wh- 語の関係詞と異なるということは、生成文法では 1970 年代から仮定されており、Huddleston (1984)、Huddleston and Pullum (2002) でも論じられているが、辞書や学校文法にその成果が生かされていない。小論の目的は、that に関係詞の用法がないと考えることで、「関係詞の that」の用法が正しく理解でき、英文法の例外が減るということを示すことである。まず第 2 節で、生成文法による関係詞と接続詞の分析を概観する。第 3 節では、「関係詞の that」を、平叙の内容節 (declarative content clause) を導入する従属接続詞の that と考えるべきだとする Huddleston (1984)、Huddleston and Pullum (2002) の 4 つの論点を解説する。第 4 節では、さらに 5 つの論点を付け加える形で、「関係代名詞の that」と関係代名詞の which および指示代名詞の that との相違点を示し、that が関係代名詞でないことを述べる。また「関係代名詞の that」と接続詞の that の共通点を示し、「関係代名詞の that」は接続詞であることを述べる。

2. 生成文法による関係詞と接続詞の分析

生成文法では、接続詞の that を補文標識 (complementizer: 初期は COMP、1980 年代からは C と略) として扱ってきた。主節に対して、動詞や前置詞の目的語 (生成文法では補部) となる従属節 (生成文法では補文) の始まりを示す

標識と that を考える。

- (1) Charles thinks [_{CP} that [_{IP} Ms Kinian is a genius]

that は C で CP の主部 (head) であり、補部として節 (IP) を取っている。そして、wh- 語の関係詞は (2a) のような基底位置から (2b) のような C の指定辞 (Specifier) の位置に移動してくる。

- (2) a . This is the house [_{CP} that John lives in *which*]
 b . This is the house [_{CP} *which* [_{C'} that John lives in]]

この (2b) のままでは文法的に正しくない。which か that の一方または両方が削除される必要がある。すなわち、許される形は次の 3 つとなる (van Riemsdijk and Williams (1986) も参照)。

- (3) a . This is the house [_{CP} *which* [_{C'} ~~that~~ John lives in]]
 b . This is the house [_{CP} ~~which~~ [_{C'} that John lives in]]
 c . This is the house [_{CP} ~~which~~ [_{C'} ~~that~~ John lives in]]

伝統文法や学校文法では (3a) を関係代名詞の which、(3b) を「関係代名詞の that」、(3c) を関係代名詞の省略と呼んでいるのである。

(2b) が許されないのは、移動した関係詞の wh- 語が節の始まりを示す働きをするため、補文標識の that を示す必要がなく、明示してしまうと冗長になるためであると考えられる。これは、Chomsky and Lasnik (1977) が二重補文標識フィルター (Doubly-filled Comp filter) で排除したものであるが、英語の方言や他の言語では、wh- 語と補文標識の共起を許す場合がある (Bayer and Brandner (2008) を参照)。

伝統文法や学校文法は、先行詞の右に 1 つの位置しか見えないために、(3b)

の that を「関係代名詞の that」として、(3a) の関係代名詞の which と同じに考えている。しかし、生成文法では、wh- 語は基底位置から補文標識 C の指定辞位置に移動してくるのに対し、that はもともと補文標識の位置に基底生成されるということである。すなわち、that は wh- 語と異なる位置に生じる、異なる要素と考えられている。

3. 関係詞の that は接続詞 : Huddleston and Pullum (2002) の論点

伝統文法および学校文法では、関係代名詞として who, which, that、関係副詞として where, when, why, how, that を提示する。しかし、that を関係詞(特に関係代名詞)として分析することには数多くの問題がある。Huddleston and Pullum (2002 : 1056) は、「関係詞の that」を、平叙の内容節 (declarative content clause) を導入する従属接続詞の that と考えるべきだとして、次の 4 つの点をあげている (Huddleston (1984 : 397) も参照)。

- (4) a. 先行詞のタイプと関係化される要素が広範囲である
- b. 上方への浸透がない
- c. 定形である
- d. 省略可能である

これらの点を順に見ていこう。まず (4a) の先行詞のタイプと関係化される要素が広範囲であることは、次の例で示されている。

- (5) a. They gave the prize to the girl [that spoke first]. [who]
- b. Have you seen the book [that she was reading]? [which]
- c. He was due to leave the day [that she arrived]. [when]
- d. He followed her to every town [that she went]. [where]
- e. That's not the reason [that she resigned]. [why]

- f . I was impressed by the way [that she controlled the crowd].
 [*how]
- g . It wasn't to you [that I was referring]. [no *wh* form]
- h . She seems to be the happiest [that she has ever been].
 [no *wh* form]

that は(5a-e)のように、さまざまな *wh*-語の代わりをするだけでなく、(5f-h)のように、対応する *wh*-語がない場合にも用いられる。このような広範囲の用法を持つ代用形は他に例がない¹。

次に、(4b) の上方への浸透がないことは、次の例で示される。

- (6) a . the woman [whose turn it was]
 b . *the woman [that's turn it was]
- (7) a . the knife [with which he cut it]
 b . *the knife [with that he cut it]

(6a) や (7a) のような複合的な *wh* 関係詞句に対応する複合的な *that* 関係詞句は (6b) や (7b) に示されるように存在しないのである。

3 つめに、(4c) にあげたように、*that* 関係節は定形でなければならない。

- (8) a . a knife with which to cut it
 b . *a knife that to cut it with
 c . a knife to cut it with

¹ (2g) や次の (i) と (ii) のような分裂文も一緒に扱われ、下線部に対応する代用形が英語にないことが指摘されている。

(i) It was with considerable misgivings [that her parents agreed to this proposal].
 (ii) It was in order to avoid this kind of misunderstanding [that I circulated a draft version of the report].

非定形の to 不定詞は、(8a) のように wh 関係節 (句) では許されるが、(8b) のように that 関係節 (句) では許されない。被修飾名詞に which も that も後続しない不定詞句は、(8c) のように許される²。

4 つめに、(4d) にあげたように、「関係詞の that」は省略できる (p. 1055)。

- (9) a. The car (that) I took was Ed's.
b. He's not the man (that) he was a few years ago.
c. I can't find the book (that) you asked for.
d. He's the one (that) they think was responsible for the first attack.

そして、この省略可能性は接続詞の that も同様に持っている (p. 953)。

- (10) a. I think [it's a good idea].
b. She said [they'd had a wonderful holiday].
c. It's a good job [we left early].

以上、Huddleston and Pullum (2002:1056) の、that を、平叙の内容節 (declarative content clause) を導入する従属接続詞の that と考えるべきだとする、4 つの点を見た。(4a)、(4b)、(4c) は「関係詞の that」は wh- 語の関係詞と異なるということ、(4d) は「関係詞の that」は接続詞の that と類似しているということを示している。次節では、こうした点を示す事実をさらにあげて、「関係詞の that」は関係詞でなく接続詞であるということを示したい。

² *a knife with that to cut it は第 2 の上方への浸透がないことでも排除される。

4. 関係詞の that は接続詞：さらなる事実

4.1 「関係詞の that」には非制限用法がない

この節では、「関係詞の that」の中でも、「関係代名詞の that」に焦点を絞って、関係代名詞の which、指示代名詞の that、および those や this という語との比較によって、「関係代名詞の that」が関係代名詞でなく、接続詞であることを述べていく。第1は、関係代名詞の which と異なり、「関係代名詞の that」には非制限用法がないということである。関係代名詞の which には、次に示すような非制限用法がある（『ジーニアス大英和辞典』）。

- (11) a. [単一の語を先行詞として] そしてそれは [を]
 b. [句・節・文またはその内容を先行詞として] そしてそのことは
 c. [人を表す名詞・形容詞を先行詞として] …であるがそれは [を、に] …
- (12) a. Her clothes, which are all made in Paris, are beautiful.
 b. Her feet were bare, which [as] was the custom in those days.
 c. Ann is a vegetarian, which [×who, ×that] no one else in my family is.

これに対し、「関係代名詞の that」は通例制限用法として用いられる。

- (13) She was offended by the letter that accused her of racism.

(Huddleston and Pullum 2002: 1064)

(13)では、that accused her of racism が letter の集合を限定している。そして、非制限的關係詞節においては、that は用いることができない (Quirk et al. 1985: 1257-1258)。

- (14) a. *I spoke to Dr Spolsky, that was unwilling to give further details.
b. I spoke to Dr Spolsky, who was unwilling to give further details.

ただし、Hawkins (1978 : 284) は「先行詞が無生物である場合には、例外的に関係代名詞 that が非制限用法で用いられることがある」と述べて、次の例を挙げている。

- (15) a. The box, that (incidentally) had jewels in (didn't it?), was stolen.
b. *The girl, that was (incidentally) tall (wasn't she?), left the party early.

しかし、(15a) のような例は非標準的な用法と考えるべきであろう。Quirk et al. (1985 : 1257-1258) では、?* のような文法判断がなされている。

- (16) a. .*This excellent book, that has only just been reviewed, was published a year ago.
b. This excellent book, which has only just been reviewed, was published a year ago.

よって、「関係代名詞の that」には基本的に非制限用法がないと考える。

4.2 that は先行詞に有生のものをとれる

第2に、which 先行詞は物・事を先行詞とするのに対し、「関係代名詞の that」は、人・動物も「先行詞にとる」ことができる(例文は『ジーニアス大英和辞典』による)。

- (17) a. The bicycle which I sold was old.
 b. *They are the people which live next door.
- (18) a. The street that leads to our school is very wide.
 b. He's the man that lives next door to us.

(17b)が容認されないのは、wh- 語の関係詞の場合は、人の先行詞に対して、who という形を持っているからである。that は指示代名詞としても、人と物を指せるため、このことは、「関係代名詞の that」を接続詞とする積極的な証拠とはならない。しかし、「関係代名詞の that」が接続詞であって、それ自体は先行詞を必要としないと考えれば、簡単に説明できる事実である。

4.3 「関係代名詞の that」は代名詞としての数の一致をしない

第3点は、「関係代名詞の that」が指示代名詞の that と異なることである。代名詞の that は単数形であり、複数形には those を用いるが「関係代名詞の that」には複数形 those はなく、先行詞が単数でも複数でも that が用いられる。

- (19) a. Those are happy days.
 b. They don't have the books that you recommended.
 c. *They don't have the books those you recommended.

関係代名詞も代名詞の1種であるから、関係代名詞としての that が存在するのであれば、複数の先行詞を指す複数形の those が関係代名詞として使われても良さそうであるが、(19c)のように許されない。学校文法では、よく関係代名詞の先行詞は何かということが問われるが、(19b)のような例で that の先行詞が何かと問うと、複数名詞の books ということになる。これは学生・生徒に疑問を起こさせることになるが、関係代名詞 that には複数形がないという言い方をせざるをえない。

4.4 複数形の those は関係代名詞にも接続詞にもならない

第4点は、「関係代名詞の that」と接続詞の that の共通点である。関係代名詞の those が存在しないのと同様に、接続詞の those も存在しない。

- (20) a. *They don't have the books those you recommended.
b. He said (that) it was a mean practice and that I must try not to do it any more.
c. *He said those it was a mean practice and I must try not to do it any more.

(20c)のように、2つの節を同時につなぐような接続詞の those は存在しない。複数形 those が用いられない点が、「関係代名詞の that」と接続詞の that で共通している。

4.5 近距離指示の this は関係代名詞にも接続詞にもならない

第5に、空間的・心理的に話し手から遠いものをさす指示代名詞の that は「関係代名詞の that」と接続詞の that の用法を持つが、空間的・心理的に話し手に近いものをさす this は関係代名詞の用法も接続詞の用法も持たない。

- (21) a. *My cousin owns the dog *this* rescued the children.
b. *He knew *this* she was married.

この「関係代名詞の this」がないという事実も、「関係代名詞の that」は接続詞の that であるとするれば、接続詞の this がないということから自然に説明されることである。「関係代名詞の that」を認める学校文法・伝統文法では、関係代名詞には this がないということ、接続詞に this がないことは別に述べておかななくてはならない。

以上この節では、「関係代名詞の that」は関係代名詞でなく接続詞の that で

あると考えるべきことを示す5つの事実を述べた。

5. まとめ

学校文法・伝統文法で「関係代名詞の that」と呼ばれるものは、関係代名詞でなく接続詞の that であるということを、that を補文標識として wh-語と区別する生成文法の立場から述べてきた。Huddleston and Pullum (2002) の、先行詞のタイプと関係化される要素が広範囲である、上方への浸透がない、定形である、省略可能である、という4つの論点を概観し、さらに、「関係代名詞の that」には非制限用法がない、先行詞に有生のものをとれる、代名詞としての数の一致をしない、those は関係代名詞にも接続詞にもならない、this は関係代名詞にも接続詞にもならない、という5点を示して証拠とした。

学校文法で、「関係代名詞の that」をそのまま将来も関係代名詞として教え続けていくかは、大きな問題である。理解力が十分でない学生・生徒に、接続詞として教えることは混乱させることになるかもしれない。ただ、理解力があり、疑問を持つ学生・生徒には、別の考え方として紹介し、文法の例外を少なくすることが望ましい。少なくとも、教員としては、考え方を知り、理解しておくことは必要であると思われる。

参考文献

- Bayer, Josef and Ellen Brandner. 2008. On wh-head-movement and the doubly-filled-comp filter. *Proceedings of the 26th West Coast Conference on Formal Linguistics*, 87-95.
- Chomsky, Noam and Howard Lasnik. 1977. Filters and control. *Linguistic Inquiry*, 8, 425-504.
- Hawkins, John A. 1978. *Definiteness and indefiniteness: A study in reference and grammaticality prediction*. London: Croom Helm.

- Huddleston, Rodney. 1984. *Introduction to the grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey N. Leech and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- van Riemsdijk, Henk and Edwin Williams. 1986. *Introduction to the theory of grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.